

法勝寺遺跡出土の古瓦について

佐藤 宗男

近江町高溝に所在する法勝寺遺跡は、従来発見された遺物より白鳳時代の寺院址として注目されて来たものである。然るに、その遺跡の規模、遺構等については、昭和51年に一部が調査されたに過ぎず、遺跡の全体の把握がなされていない。又、現地には、礎石と思われる巨石も数ヶ所に所在するが、原位置に所在するものか移動せるものかも不明である。出土遺物の主体をなす古瓦については、地元在住の粕淵辰次翁の積年の努力によって数多く収集保管されている。又、近年調査された本遺跡の西方に所在する狐塚遺跡においても、これを補足する古瓦が出土している。

ここに、同翁の所蔵にかかる古瓦を中心として、その年代、特徴等について考察を進める。

軒 丸 瓦

1 善正寺系軒丸瓦 (図-1・2)

この文様を有する瓦については、近畿地方においても殆ど例がない。唯、大阪府羽曳野市埴生野に所在する善正寺址出土のものが、一種類あるに過ぎない。この文様は、百済の末期様式の中にあり、^{しひ}泗比時代の故地たる扶余の東南里廃寺など数ヶ寺より出土しているに過ぎない。これより、彼地との直接的な関連をうかがわせるものがあるが、ここにおいては、同型式の地方への伝播と考えるのが至当である。

本瓦と善正寺瓦とを比較するに、全体的な構成は類似しているが、細部にわたって見る時は、

少しづつ差異が認められる。先づ外区については、本瓦については、現在欠落しており如何なる構成であったかは不明である。善正寺瓦の場合は重弧文を配している。花卉については、善正寺瓦の場合は、幅が広く重厚なる感を与えているが、本瓦の場合幅は狭く繊細な感が持たれる。これは中房の直径とも関連している。又、花卉の中の子葉の外側には、本瓦にあっては、細い稜線を持っているが、善正寺瓦においては、これを欠いている。弁間については、善正寺瓦の場合、子葉を以って充たされているが、本瓦の場合はこれがなく、珠文が所在している。中房については、蓮子の数が両例とも1+8を数えるが善正寺瓦の場合には、蓮子の周囲に周環を有しているが、本瓦については、これを有しない。

年代的な考え方については、これ2点のみでは判然としないが、次に述べる山田寺式の瓦との関係もあり、相互の相関年代も不明である。或は平行するか、若干先行するかは現在のところ不明である。

2 山田寺式軒丸瓦 (図-3・4)

山田寺は、その創建より完成に至るまでには40年余りを費しており、瓦の様式としても、所謂山田寺式の範囲に入るものの詳細なる年代観は、不明な部分が多い。しかし、近年の調査の進展に伴い、創建時のものとそれ以降のものとの区分が明確になされつつある。

本遺跡出土の山田寺式の瓦については、文様の構成より、2種類が認められる。3の瓦については、中央の稜が短く、端は角張っており、次の4の瓦に先行するものと思われる。外区の文様については、山田寺の場合には、重弧文が付けられているが、本例においては付けられて

いない。中房については、これを欠くために、如何なる状態であったかは不明である。4の瓦については、弁端が丸みを帯びており、全体に平板的な感じを受ける。中房は小さく、蓮子は、1+6となっており、外区の文様はない。なお3の瓦については、米原町枝折の三大寺遺跡および長浜市大東町の大東遺跡より類似した瓦が発見されている。

3 川原寺式軒丸瓦 (図-5・6・7)

盛唐の様式を直輸入したこの文様は、川原寺の創建に使用せられ、以後の軒丸瓦の文様の規範となっていくものである。本遺跡出土の軒丸瓦のうちこれに属するものは、三種類が確認されているが、何れも小片に過ぎず、全体像が推定されるのは、一片に過ぎない。5は中房の大部分と蓮弁の一部であるが、弁の様相は判然としない。蓮子の数は磨滅のため不明であるが、大略1+8+8+12であると思われる。しかし、この5の瓦片が年代的に最も本来の川原寺の様式に近いものと思われる。次の6の軒丸瓦については、中房の約半分と蓮弁の一部があるが、これも磨滅甚だしく蓮弁の構成も不明である。蓮子の数も明確でない。7の軒丸瓦については、全体像が類推出来るが、^{はん}范がづれており、蓮弁の様相も単弁であるか、複弁であるか推定出来ない。蓮子は1+10かとも思われる。外区は僅かに^{めんたが}面違いの鋸歯文が判読される。年代については、先の5に続いて6と受継がれ7に至ると思われるが、明確な点を欠くうらみがある。

4 未詳型式軒丸瓦 (図-8)

この軒丸瓦については、その文様の構成より未だ他に類例を見ない型式である。文様の構成は、外区は無文であり、蓮弁は単弁八葉となっ

ており、中房は構成されていない。蓮子は1+4を有している。この様式は他に類型が見られず、今後の研究、類例の出土を待つものである。時期としては、様式より平安時代に入るものと思われる。

軒 平 瓦

前述の軒丸瓦に相對する軒平瓦については、現在のところ、3種類が確認されている。即ち3重弧文9と4重弧文10および扁行木葉文11・12とも考えられる3種類である。このうち4重弧文については、他の類例より山田寺式の軒丸瓦に対応し、3重弧文については、川原寺式の軒丸瓦に付隨するものと思われる。最後の扁行木葉文とも名付けられる軒丸瓦については、他にその例がなく、唯上記の未詳型式の軒丸瓦に対するものと考えられる。この軒平瓦については、現存部において別個体として左右半分づつが出土しているが、全体像をうかがい知ることが出来る。外区は無文であって、内区には、木葉状の裝飾文が綾杉状に配列されている。

以上、法勝寺址出土の古瓦について、その概要を述べたが、これらの遺物より考えて、法勝寺の存立年代は、大略7世紀後半より9世紀又は10世紀前後まで在存していたことをうかがわせるものである。

本遺跡については、未だ全面的な調査が行なわれていなく、寺域の決定、堂塔の配置の確認等は全く不明のままである。現地には土壇らしきものや、移動はしているが礎石も残されており、寺域の調査を全面的に行えば、湖北地方としては、唯一の寺域の確認された寺院址となる可能性も十分にある。最近の開発の波も本遺跡付近まで及んできており、早急なる学術的な調査と、遺跡の保存を切に望むものである。



1



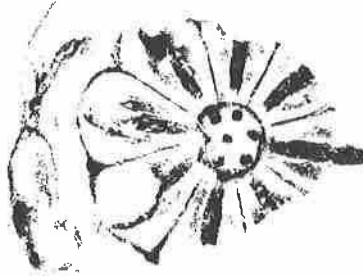
2



9



3



4



10



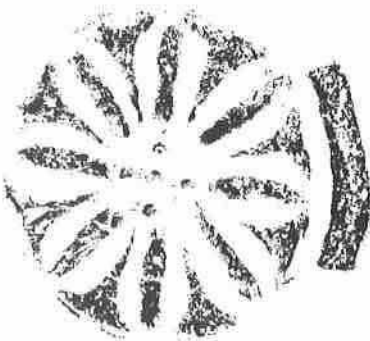
5



6



7



8



11



12

0 5 10cm